

アルカディアの墓の詩学—プッサンと牧歌の水脈—

高橋健一（成城大学）

詩作に秀でた牧人たちが穏やかな自然のなか歌を交わす土地として『牧歌』のウェルギリウスが描いたアルカディアは、無数の表現を生んだ。ルーヴル美術館にあるプッサンの《アルカディアの牧人たち》はその事例でも最もよく知られるものである。しかし一六三八—一四〇年頃に置かれるこの作品は死の印象とともに語られてきた。前景では土に無装飾の石棺が立ち、奥の眺めを塞いでいる。石棺の正面には「ET IN ARCADIA EGO」の謎めいた銘文が刻まれている。四人の人物がそれを縁どるように並び、前に身を傾けている。

銘文をもとに、ベッローリは画面の墓を死の象徴と理解したのにたいし、フェリビアンは特定の個人をその墓の主に想定した。しかし画家の同時代のこれらの批評家は、作品を死に屈する幸福の必然を説くものと教訓的にみる点で一致し、以後の言説の前提をなしている。それにたいして発表では、プッサンのアルカディアの墓の生産的なありようを強調したい。基本的にはフェリビアンを支持しつつ文学の伝統を参照したパノフスキーは慎重にも、プッサンの「アルカディア人は、非情な未来を警告されるよりは、むしろ美しい過去について穏やかな瞑想に耽っている」と言う。しかしウェルギリウスでもその遺産の相続者たちでも、アルカディアの墓はたんに回顧の契機ではなく、先人の詩想を継承しつつ創造の力を得るための場として描かれている。憂鬱質の牧人を月桂冠で飾ったプッサンの図像は、その系譜から逸脱しない。新ストア主義の文脈にも重ねられた作品は、影の描写のために絵画の起源に言及するとも論じられたが、ここでは詩的靈感の伝授を主題と定める画家の仕事の一例として捉えたい。以下の各論が図像の構造と機能を具体的に説明するだろう。

作品には《メディチの壺》との類似が指摘できる。ローマのヴィッラ・メディチにあったこの古代の作例の浮き彫りには、補修の結果、イピゲネイアの犠牲の場面が認識されてきた。娘の死がディアナの介入で生者に希望をもたらすという、この図像の物語の表現の仕組みが、プッサンの着想に反映されたと主張したい。プッサン作品では黄と青の衣を纏う女性に超越的な位格が想定されて、その役割をめぐり多様な提案がなされてきた。発表ではこれをアレトウーサと同定し、過去と現在、ギリシアとイタリア、非在の理想郷と現実の世界とを繋ぐものと考えたい。ディアナのお供のニンフのアレトウーサは、アルカディアの河の神アルペイオスの求愛を拒んで水に変身し、大地の穴から逃げシチリアに至り、泉として現れた。プッサン本人がすでに実現していた別の《アルカディアの牧人たち》（チャッツワース、デヴォンシャー・コレクション）にも、グエルチーノの手になるその先例（ローマ、パラッツォ・バルベリーニ国立古美術館）にも、水の働きが観察される。三作にはこの点でも創意の連続性があると確認したい。